

真宗同学会大会発表要旨

平家物語にあらわれた儒教

渡 辺 貞 磨

平家物語には、五経をはじめ、臣軌、帝範、貞觀政要等の多くの漢籍が引用せられており、儒教的な思想は各所に見えている。が、今は、それがもつとも濃厚にあらわれている平重盛に関する物語に問題を限定して、以って、平家物語にあらわれている儒教思想がいかなるものであるか、ということの一斑を申し述べたいと思う。

周知の如く、平重盛は、平家物語において、父清盛の暴逆をいましめるきわめて徳高き人物として描かれている。父をいさめるというこの形式自体が、すでに儒教的なものに感じられるのであるが、今、特に注目せねばならないのは、鹿谷の陰謀の露頭にさいしての重盛の清盛への諫言であらう。

鹿谷の陰謀とは、後白河法皇と、その近臣藤原成親らが、鹿谷において平家討伐の計をめぐらした、というその計画を指すのであるが、この陰謀が平家方に知れたとき、怒りにまかせて成親をとらえて死罪にしようとし、次には、法皇を遠方に移し奉ろうと企てている。この時、重盛は二度にわたって父をいさめ、その計画をくいとめたのである。

まず、成親の死罪を諫止した、その内容を考えてみると、①彼成親は法皇の寵臣であるから、これを死罪にするということとは穩当ではない、②尚書には「刑の疑しきをば輕んぜよ。功の疑しきをば重んぜよ。」とある、従って、死罪は重きにすぎず、③それにもかかわらず、敢て死罪を行なうならば、易経に「積善家必余慶あり。積惡門には必余殃とどまる。」と説かれている如く、必ず一門に惡しき結果がもたらされるであらう、ということになる。

たしかに、①の忠の立場と云い②の尚書・易経と云い、この諫言は表面的にはいかにも儒教精神でつらぬかれているの如くである。だが、ひるがえって考えるならば、①②は、成親を死罪にするということが何故に惡であるか、という抽象理論なのであって、なんら具体的な拘束力をもっていない。③の易経のことばにおいて、はじめて、その惡の報いが示される。ところが、この「……積惡門には余殃とどまる」という思想は、実はこの物語を一貫して流れる仏教の因果応報の思想と密着しているのであって、儒教として、独立した立場を有ってはいないのである。

かかる儒教と仏教との結びつきは、法皇を遠方に移し奉らうという父の計画を思いとどまらせた重盛の諫言において、さらに濃厚である。まず、「人の運命の傾んとは、必惡事を思立候也」という儒教的なことばが注目せられる。だが、ここに述べられた思想は、この物語の仏教的因果觀と直結しているのであって、決して儒教独自の基盤に立つものではない。重盛は、これに続いて、父清盛が、前太政大臣であり、しかも出家の身

でありながら甲冑をまとうていすることをいましめ、それが破戒の罪を招き、五常の法にもとると説いている。こゝには、あきらかに儒仏一致の考え方を見ることができであろう。

次いで、彼は父に天子の尊厳を強調するのであるがそれについて、重盛は、四恩という仏教思想、伯夷叔齊あるいは許由の故事という儒教精神の両面から根拠を求めている。しかもその上、君に対して忠を致すことが、神明仏陀のよろこび給うところとなるのだ、と結んでいるのである。儒仏不離の關係は、ここにも亦、まぎれもなく現われている。

ところで、かくの如く父に忠を説いた重盛は、それでもなお、父が法皇に対して武力を以て報復しようとするならば、自分手兵をひきいて院を守護し奉るであろう、と一度は父に告げている。だが、それは、逆に己が父に敵対するという不孝を招く。ここにおいて重盛は、忠孝の相剋に苦悩にせねばならなかった。云わば、これは、儒教という世間的な道徳の限界であり、人間としての限界であろう。それ故に彼は、このおのれの苦悩を、「唯末代に生を受けて、かかる憂目に逢候重盛が果報の程こそ拙う候へ」、即ち、仏教の宿業観によって把握せねばならなかったのである。

この自覚は、重盛に、やがて、かかる世間からの救済を願わしめるに至るであろう。事実、彼は、これより一年ほど後、諸の功徳を積み、臨終正念に住して、往生を遂げたのである。

かくの如く見るならば、平家物語に描かれた重盛において、儒教の世間的な道徳を守ることが、そのまま仏教的な意味での善根ということになっている、逆に、儒教の法にもとる行

為が、仏教的な意味での惡業とせられ、未来に惡しき結果をもたらすと考えられている、と判断してよいであろう。清盛は、我子重盛を「内には五戒を保て慈悲を先とし、外には五常を乱らず、礼儀を正しうし給ふ人」と評しているが、重盛においては仏教と儒教とは、文字通りうちとこの關係、内面的本質的なものと、それをつつむ外面的なものといった關係にあったのである。

我国への儒教の伝来はきわめて古い。それは、飛鳥・奈良・平安の各時代を通じて研究せられて来た。そのことは、十七条の憲法や当時の大学の学科目、あるいは菅原道長の事跡、等を見てもあきらかである。しかし、そうした研究は、ごく一部のインテリの机上の学問であって、儒教の精神が実生活の上に反映するということは、きわめてまれではなかったか、と考えられる。

だが、中世以後、儒教は国民の精神生活の中に浸透して行き、近世に至って道徳の基盤を形成するに至る。上述の如き平家物語にあらわれた儒教思想は、やがてこの思想が我が国の人々の精神的なバックボーンとなって行く過程の、その萌芽的なあらわれの一つと云ってよいであろう。さらに、平家物語が、語り物として民間に伝承せられて行くその過程において、儒教精神の浸透にあずかって力があつた、とも考えられる。

平家物語よりも少しく後に成立した神皇正統記は、春秋の思想にのっとりて記述せられたものと一般に認められているが、たしかに我国において、これほど儒教の影響を濃厚にうけ、しかもその思想を体系的にとのえた歴史書はこれまでなかった

のである。そして下って太平記を見るならば、儒教が、政治の武士の道徳として、たしかな根を下しはじめていることを知ることができる。

このような儒教的な思想傾向が、近世に入ってからに有力となり、所謂、武士道、あるいは町人の義理とかたちで、国民道徳の基礎を築きあげるに至ったことは、改めて申すまでもない。

平家物語における儒教思想は、先にその一斑を申し述べた如く、仏教に対立するものではなく、それ自身独立の体系をもっているものではないが、儒教思想がやがて我が国民の精神生活を支配するようになる。その最も早い時代に於ける具体的な一つのあらわれとして、注目すべきものである。と云つてよいであらう。

◎なお、この研究には、テキストとして寛一別本を用いた。

真実の宗教としての浄土真宗

伊 東 慧 明

真宗の教学は、浄土真宗が真実の宗教であるということを、自他に明らかにすることではなければならない。では、なぜ浄土真宗が真実の宗教であり、仏教の真宗であるといえるのであろうか。

これについて、金子大栄先生は「真宗の名は、浄土教のみで

はなく、広く仏教を呼ぶものである」とのべて、慧空の『叢林集』に、真宗に六重の義ありとするのは「真実の宗教の展開を顕わすものとして当然」であるとし、今日「最も必要なことは、真宗を仏教として了解することである」と教示されている。

(顕浄土真実教文類講録・一五頁)

いうまでもなく、仏教とは、仏の教によつて仏の道をゆくものとなることである。したがって、教と道とは、仏教の真宗の眼目である。仏教がなければ、仏道は、この世界に実現されることなく、仏道として展開されぬ仏教は、真実の仏教ではない。しかるに現状はどうか。行証をとまなわぬ仏教が、現に世に存在するではないか。それが、親鸞聖人の「信知、聖道諸教、為在世正法、而全非像末法滅之時機、已失時乖機也」という批判であり、浄土真宗こそ「在世正法、像末法滅、濁惡群萌、齊悲引也」というべき「時機熟之真教」である。(化身土巻・及び教巻)

「この、如来の本願に立脚地をおく歴史観にもとづいて、仏道の歴史をかえりみれば、そこに、浄土の教こそ真の仏道だと領解し、それによって仏道の歴史にエポックを形式した多くの祖師が見出された。その浄土の祖師の伝承する仏道の真実が、親鸞聖人をして「聖道諸教行証久廢、浄土真宗証道今盛」と決判せしめたのである。そして、この本願の末法史観を眼として開顕されたのが、教行信証の教学である。

親鸞聖人は、伝統的な教行証の教学に即しながら「真宗の教行証を敬信して」(総序、しかも、教行証が教理行果として領解されるにいたった誤りを正し、真宗の教行証が、真実の仏道